

昭和60年度（問 題）

1. 正規母集団 $N(\mu, \sigma^2)$ で、 $\mu = 30$ という仮説を $\mu = 30 + \sigma$ という対立仮説に対して検定したい。有意水準 1% の右側検定で、第 2 種の誤りをおかす確率が 5% となるように標本の大きさを定めよ。

(注) $u(0.01) = 2.33, u(0.05) = 1.65$

2. 平均 m , 分散 σ^2 をもつ大きさ N の有限母集団から n 個の標本 X_1, X_2, \dots, X_n を非復元抽出するときの \bar{X} の平均および分散を求めよ。

ただし、 $\bar{X} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i$ とする。

3. X_1, X_2, \dots, X_n は互に独立で、いずれも θ の不偏推定量とし、分散 $V(X_i) = \sigma_i^2 > 0$ ($i = 1, 2, \dots, n$) とする。このとき X_1, X_2, \dots, X_n の 1 次式となる θ の不偏推定量のなかで、分散が最小となるものを求めよ。

4. ある学校で 50 人の生徒について、英語のテストの点数と数学のテストの点数との相関係数 (r) を求めたところ、 $r = 0.33$ となったという。このとき、英語の成績は数学の成績と無関係である (母相関係数 = 0) といえるか。有意水準 5% で検定せよ。

(注) $t_{48}(0.025) = 2.01$

5. 待ち行列の理論に関する以下の考察について、(A)~(I) にあてはまる算式を解答用紙に記入せよ。

(前提) ① サービス・ステーションは 1 ケ所とする。

② 客は平均到着率 (単位時間当たりの到着の割合) λ を有するポアソン分布にしたがって到着し、平均サービス率 (平均サービス時間の逆数) μ の指数分布にしたがうサービスを受けて退去する。

③ サービスは客の到着順に処理される。

$P_n(t)$: 時刻 t に n 人の客がいる確率

λdt : 時刻 t と $t + dt$ の間に 1 人の客が到着する確率

μdt : 時刻 t と $t + dt$ の間に 1 人のサービスが終了する確率

} として

- (1) $P_0(t + dt)$ について考えて見よう。

時刻 $t + dt$ に客が 1 人もいない状態の確率は

(a) 時刻 t に客が誰もいなくて、かつ時刻 t と $t + dt$ の間に誰もこない場合と

(b) 時刻 t に客が 1 人いたが、時刻 t と $t + \Delta t$ の間にサービスが終了し、かつ時刻 t と $t + \Delta t$ の間に誰もこない場合

の確率の和と考えられるから

$$P_0(t + \Delta t) = [\text{(A)}] \text{ となる。}$$

$P_0(t)$ を移項し、両辺を Δt で割ると

$$\frac{P_0(t + \Delta t) - P_0(t)}{\Delta t} = [\text{(B)}] \text{ となる。}$$

更に $\Delta t \rightarrow 0$ とすると

$$P_0'(t) = \lim_{\Delta t \rightarrow 0} \frac{P_0(t + \Delta t) - P_0(t)}{\Delta t} = [\text{(C)}] \text{ が得られる。}$$

(2) 次に $P_n(t + \Delta t)$ について考えると

$$P_n(t + \Delta t) = [\text{(D)}]$$

となり、(1)と同様にして $P_n'(t)$ を求めると

$$P_n'(t) = \lim_{\Delta t \rightarrow 0} \frac{P_n(t + \Delta t) - P_n(t)}{\Delta t} = [\text{(E)}] \text{ となる。}$$

(3) 時間が十分経過して $P_n(t)$ が t に無関係となり、 $P_n(t) = P_n$ と表わせかつ $\sum_{n=0}^{\infty} P_n = 1$ である場合 ($\lambda < \mu$) を考えよう。

この場合 $P_n'(t) = 0$ ($n = 0, 1, 2, \dots$) であるから

$$\left. \begin{array}{l} [\text{(F)}] = 0 \dots\dots\dots (i) \\ [\text{(G)}] = 0 \dots\dots\dots (ii) \end{array} \right\} \text{ を得る。}$$

上記 (i), (ii) 式より P_n を求めると

$$P_n = [\text{(H)}] \dots\dots\dots (iii)$$

となる。

(4) (iii) 式を使用して、サービスを受けている客と待っている客の数の平均値 $L (= \sum_{n=0}^{\infty} n P_n)$ を求めると

$$\begin{aligned} L &= \sum_{n=0}^{\infty} n P_n \\ &= [\text{(I)}] \end{aligned}$$

となる。

昭和60年度（解答例）

1. 大きさ n の標本変量平均 \bar{X} は、仮説 $\mu = 30$ のもとで、 $N(30, \frac{\sigma^2}{n})$ に従う。このとき

$$Pr\left(\frac{\bar{X} - 30}{\frac{\sigma}{\sqrt{n}}} > 2.33\right) = 0.01$$

であるから、有意水準 1% の右側検定で、

$$\bar{X} < 30 + 2.33 \frac{\sigma}{\sqrt{n}}$$

のとき、仮説 $\mu = 30$ を採ることとなる。

ところで、対立仮説 $\mu = 30 + \sigma$ のもとで、 \bar{X} は $N(30 + \sigma, \frac{\sigma^2}{n})$ に従い、そのとき

第 2 種の誤りをおかす確率は

$$\begin{aligned} Pr\left(\bar{X} < 30 + 2.33 \frac{\sigma}{\sqrt{n}}\right) \\ = Pr\left(\frac{\bar{X} - (30 + \sigma)}{\frac{\sigma}{\sqrt{n}}} < 2.33 - \sqrt{n}\right) \end{aligned}$$

となる。この確率が 5% となるのは

$$2.33 - \sqrt{n} = -1.65$$

のときであり、これより n を求めると

$$n \approx 15.84$$

となる。従って、標本の大きさは 16 とすればよい。

2. 大きさ N の有限母集団の各要素を a_k ($k = 1, 2, \dots, N$) で表す。このとき

$$P_r(X_i = a_k) = \frac{N-1}{N} \frac{P_{n-1}}{P_n} = \frac{1}{N}, \quad i = 1, 2, \dots, n$$

であるから, X_i の平均 $E[X_i]$ は

$$E[X_i] = \sum_{k=1}^N a_k \cdot P_r(X_i = a_k) = \frac{1}{N} \sum_{k=1}^N a_k = m$$

となる。従って, \bar{X} の平均 $E[\bar{X}]$ は

$$\begin{aligned} E[\bar{X}] &= E\left[\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i\right] \\ &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n E[X_i] \\ &= \frac{1}{n} \cdot n \cdot m \\ &= m \end{aligned}$$

である。

次に, \bar{X} の分散 $V[\bar{X}]$ を求める。

$$\begin{aligned} V[\bar{X}] &= E[\bar{X}] = E[(\bar{X} - m)^2] \\ &= E\left[\left\{\left(\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i\right) - m\right\}^2\right] \\ &= E\left[\left\{\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (X_i - m)\right\}^2\right] \\ &= \frac{1}{n^2} E\left[\sum_{i=1}^n (X_i - m)^2 + \sum_{\substack{i,j=1 \\ i \neq j}}^n (X_i - m)(X_j - m)\right] \\ &= \frac{1}{n^2} \left\{ \sum_{i=1}^n E[(X_i - m)^2] + \sum_{\substack{i,j=1 \\ i \neq j}}^n E[(X_i - m)(X_j - m)] \right\} \end{aligned}$$

ところで、

$$\begin{aligned}
 E[(X_i - m)^2] &= \sum_{k=1}^N (a_k - m)^2 P_r(X_i = a_k) \\
 &= \frac{1}{N} \sum_{k=1}^N (a_k - m)^2 \\
 &= \sigma^2
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 E[(X_i - m)(X_j - m)] &= \sum_{\substack{k,l=1 \\ k \neq l}}^N (a_k - m)(a_l - m) P_r(X_i = a_k, X_j = a_l) \\
 &= \frac{1}{N(N-1)} \sum_{\substack{k,l=1 \\ k \neq l}}^N (a_k - m)(a_l - m) \\
 &= \frac{1}{N(N-1)} \left\{ \sum_{k=1}^N (a_k - m) \sum_{l=1}^N (a_l - m) - \sum_{k=1}^N (a_k - m)^2 \right\} \\
 &= \frac{1}{N(N-1)} (0 - N\sigma^2) \\
 &= -\frac{\sigma^2}{N-1}
 \end{aligned}$$

従って

$$\begin{aligned}
 V[\bar{X}] &= \frac{1}{n^2} \left(\sum_{i=1}^n \sigma^2 - \sum_{\substack{i,j=1 \\ i \neq j}}^n \frac{\sigma^2}{N-1} \right) \\
 &= \frac{1}{n^2} \left\{ n\sigma^2 - n(n-1) \frac{\sigma^2}{N-1} \right\} \\
 &= \frac{N-n}{N-1} \cdot \frac{\sigma^2}{n}
 \end{aligned}$$

$$3. \quad X = a_1 X_1 + a_2 X_2 + \cdots + a_n X_n$$

とおくと、各 $X_i (i = 1, 2, \dots, n)$ が θ の不偏推定量であるから、

X の期待値 $E(X)$ は

$$\begin{aligned} E(X) &= a_1 E(X_1) + a_2 E(X_2) + \cdots + a_n E(X_n) \\ &= (a_1 + a_2 + \cdots + a_n) \theta \end{aligned}$$

となる。 X が θ の不偏推定量であるための条件から、

$$a_1 + a_2 + \cdots + a_n = 1 \quad \cdots \cdots \textcircled{1}$$

が成り立つ。

X の分散 $V(X)$ は、題意より

$$\begin{aligned} V(X) &= a_1^2 V(X_1) + a_2^2 V(X_2) + \cdots + a_n^2 V(X_n) \\ &= a_1^2 \sigma_1^2 + a_2^2 \sigma_2^2 + \cdots + a_n^2 \sigma_n^2 \quad \cdots \cdots \textcircled{2} \end{aligned}$$

となる。

①の条件の下で、②を最小とする a_1, a_2, \dots, a_n を求める。

$$L = a_1^2 \sigma_1^2 + a_2^2 \sigma_2^2 + \cdots + a_n^2 \sigma_n^2 - \lambda (a_1 + a_2 + \cdots + a_n - 1)$$

とおき、 a_1, a_2, \dots, a_n について偏微分する。

$$\frac{\partial L}{\partial a_1} = 2a_1 \sigma_1^2 - \lambda$$

$$\frac{\partial L}{\partial a_2} = 2a_2 \sigma_2^2 - \lambda$$

.....

$$\frac{\partial L}{\partial a_n} = 2a_n \sigma_n^2 - \lambda$$

各 $\frac{\partial L}{\partial a_i} (i = 1, 2, \dots, n)$ を 0 とおくと

$$a_i = \frac{\lambda}{2\sigma_i^2} \quad (i = 1, 2, \dots, n) \quad \dots\dots\dots\textcircled{3}$$

が得られる。 $a_1 + a_2 + \dots + a_n = 1$ より

$$\lambda = \frac{2}{\left(\frac{1}{\sigma_1^2} + \frac{1}{\sigma_2^2} + \dots + \frac{1}{\sigma_n^2}\right)}$$

であるから、このとき各 a_i ($i = 1, 2, \dots, n$) は

$$a_i = \frac{1}{\sigma_i^2} / \left(\frac{1}{\sigma_1^2} + \frac{1}{\sigma_2^2} + \dots + \frac{1}{\sigma_n^2}\right) \quad \dots\dots\dots\textcircled{4}$$

となる。

ここで、これらの a_i ($i = 1, 2, \dots, n$) に対して②が最小となることを示す。
いま、 X_1, X_2, \dots, X_n の1次式で θ の不偏推定量なる他の式

$$X' = a'_1 X_1 + a'_2 X_2 + \dots + a'_n X_n \quad (a'_1 + a'_2 + \dots + a'_n = 1)$$

が与えられたとすると、

$$\begin{aligned} V(X') &= a_1'^2 \sigma_1^2 + a_2'^2 \sigma_2^2 + \dots + a_n'^2 \sigma_n^2 \\ &= \sum_{i=1}^n \left\{ a_i + (a'_i - a_i) \right\}^2 \sigma_i^2 \\ &= \sum_{i=1}^n a_i^2 \sigma_i^2 + 2 \sum_{i=1}^n a_i (a'_i - a_i) \sigma_i^2 + \sum_{i=1}^n (a'_i - a_i)^2 \sigma_i^2 \end{aligned}$$

となる。③より、

$$a_1 \sigma_1^2 = a_2 \sigma_2^2 = \dots = a_n \sigma_n^2$$

であるから

$$2 \sum_{i=1}^n a_i (a'_i - a_i) \sigma_i^2 = 2 a_1 \sigma_1^2 \sum_{i=1}^n (a'_i - a_i) = 0$$

また、 X' は X と異なる推定量であるから、少なくとも1つの i ($i = 1, 2, \dots, n$) に対して

$$a'_i \neq a_i$$

が成り立つ。従って

$$\begin{aligned} V(X') &= \sum_{i=1}^n a_i^2 \sigma_i^2 + \sum_{i=1}^n (a'_i - a_i)^2 \sigma_i^2 \\ &> \sum_{i=1}^n a_i^2 \sigma_i^2 = V(X) \end{aligned}$$

すなわち、 a_i が④によって与えられるとき②は最小となる。

故に、求める推定量は

$$\left(\frac{1}{\sigma_1^2} + \frac{1}{\sigma_2^2} + \dots + \frac{1}{\sigma_n^2} \right) \sum_{i=1}^n \frac{1}{\sigma_i^2} X_i$$

である。

4. 2次元正規母集団 $N(\mu_1, \mu_2; \sigma_1^2, \sigma_2^2; \rho)$ からの標本

$$(x_1, y_1), (x_2, y_2), \dots, (x_n, y_n)$$

によって作られた母相関係数 ρ の推定値である標本相関係数

$$r = \frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})}{\sqrt{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2 \sum_{i=1}^n (y_i - \bar{y})^2}}, \quad \left(\text{ただし, } \bar{x} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i, \bar{y} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n y_i \right)$$

は、 $\rho = 0$ のとき確率密度関数が

$$f(r) = \frac{\Gamma\left(\frac{n-1}{2}\right)}{\sqrt{\pi} \Gamma\left(\frac{n-2}{2}\right)} (1-r^2)^{\frac{n-4}{2}}$$

の分布に従う。このとき、統計量

$$T = \frac{r}{\sqrt{1-r^2}} \sqrt{n-2}$$

は自由度 $n-2$ の t -分布

$$g(t) = \frac{\Gamma\left(\frac{n-1}{2}\right)}{\sqrt{(n-2)\pi} \Gamma\left(\frac{n-2}{2}\right)} \left(1 + \frac{t^2}{n-2}\right)^{-\frac{n-1}{2}}$$

に従う。

いま、帰無仮説 $\rho = 0$ ，対立仮説 $\rho \neq 0$ の検定を有意水準 5% で行なう。与えられた標本 ($n = 50$) において

$$T = \frac{r}{\sqrt{1-r^2}} \sqrt{48}$$

は自由度 48 の t -分布に従う。このとき、有意水準 5% の棄却域は

$$R = \{T \mid |T| > 2.01\}$$

であり、 T の実現値は

$$T_0 = \frac{0.33}{\sqrt{1-(0.33)^2}} \sqrt{48} \approx 2.43$$

であるので、 $T_0 \in R$ となり、帰無仮説 $\rho = 0$ は棄却される。すなわち、有意水準

5%で、"英語の成績は数学の成績と無関係である" とはいえない。

5.

(A) $P_0(t + \Delta t)$ は次の2つの確率の和である：

◦時刻 t に客が誰もいなくて、 $[t, t + \Delta t]$ に誰も到着しない確率—— $P_0(t) \cdot (1 - \lambda \Delta t)$

◦時刻 t に客が1人いたが、 $[t, t + \Delta t]$ にサービスが終了し、かつ $[t, t + \Delta t]$ に誰も到着しない確率—— $P_1(t) \cdot \mu \Delta t \cdot (1 - \lambda \Delta t)$

すなわち、

$$P_0(t + \Delta t) = \boxed{P_0(t) \cdot (1 - \lambda \Delta t) + P_1(t) \cdot \mu \Delta t \cdot (1 - \lambda \Delta t)} \quad \dots\dots(A)$$

(B) 上記の算式を変形する。

$$P_0(t + \Delta t) - P_0(t) = \Delta t \{-\lambda P_0(t) + \mu P_1(t) - \lambda \mu P_1(t) \Delta t\}$$

$$\frac{P_0(t + \Delta t) - P_0(t)}{\Delta t} = \boxed{\mu P_1(t) - \lambda P_0(t) - \lambda \mu P_1(t) \Delta t} \quad \dots\dots(B)$$

(C)

$$\begin{aligned} P_0'(t) &= \lim_{\Delta t \rightarrow 0} \frac{P_0(t + \Delta t) - P_0(t)}{\Delta t} \\ &= \lim_{\Delta t \rightarrow 0} \{\mu P_1(t) - \lambda P_0(t) - \lambda \mu P_1(t) \Delta t\} \\ &= \boxed{\mu P_1(t) - \lambda P_0(t)} \quad \dots\dots(C) \end{aligned}$$

(D) $P_n(t + \Delta t)$ は次の4つの確率の和である：

◦時刻 t に客が $n - 1$ 人いて、 $[t, t + \Delta t]$ に1人到着しかつ誰もサービスが終了しない確率—— $P_{n-1}(t) \cdot \lambda \Delta t \cdot (1 - \mu \Delta t)$

◦時刻 t に客が n 人いて、 $[t, t + \Delta t]$ に誰も到着せずかつ誰もサービスが終

了しない確率—— $P_n(t) \cdot (1 - \lambda \Delta t) \cdot (1 - \mu \Delta t)$

◦時刻 t に客が n 人いて, $[t, t + \Delta t]$ に 1 人到着しかつ 1 人サービスが終了する確率—— $P_n(t) \cdot \lambda \Delta t \cdot \mu \Delta t$

◦時刻 t に客が $n + 1$ 人いて, $[t, t + \Delta t]$ に誰も到着せずかつ 1 人サービスが終了する確率—— $P_{n+1}(t) \cdot (1 - \lambda \Delta t) \cdot \mu \Delta t$

すなわち

$$\boxed{P_{n-1}(t) \cdot \lambda \Delta t \cdot (1 - \mu \Delta t) + P_n(t) \cdot (1 - \lambda \Delta t) \cdot (1 - \mu \Delta t)}$$

$$+ \boxed{P_n(t) \cdot \lambda \Delta t \cdot \mu \Delta t + P_{n+1}(t) \cdot (1 - \lambda \Delta t) \cdot \mu \Delta t} \quad \dots\dots(D)$$

(E) 上記の算式

$$P_n(t + \Delta t)$$

を変形すると

$$\frac{P_n(t + \Delta t) - P_n(t)}{\Delta t} = (\lambda - \lambda \mu \Delta t) P_{n-1}(t) + (-\lambda - \mu + 2\lambda \mu \Delta t) P_n(t)$$

$$+ (\mu - \lambda \mu \Delta t) P_{n+1}(t)$$

従って,

$$P_n'(t) = \lim_{\Delta t \rightarrow 0} \frac{P_n(t + \Delta t) - P_n(t)}{\Delta t}$$

$$= \boxed{\lambda P_{n-1}(t) - (\lambda + \mu) P_n(t) + \mu P_{n+1}(t)} \quad \dots\dots(E)$$

(F), (G) 時間が十分経過して $P_n(t)$ が t と無関係となり, $P_n(t) = P_n$ と表わせる状態では $P_n'(t) = 0$ ($n = 0, 1, 2, \dots\dots$) であるから, このとき,
 $n = 0$ ならば

となり，これを変形して

$$P_n = \left(\frac{\lambda}{\mu}\right)^n P_0$$

を得る。また， $\sum_{n=0}^{\infty} P_n = 1$ ($0 < \lambda < \mu$) であることより

$$\frac{1}{1 - \frac{\lambda}{\mu}} P_0 = 1$$

であるから，

$$P_0 = 1 - \frac{\lambda}{\mu}$$

従って

$$P_n = \boxed{\left(1 - \frac{\lambda}{\mu}\right) \left(\frac{\lambda}{\mu}\right)^n} \quad \cdots\cdots\text{(H)}$$

(I)

$$\begin{aligned} L &= \sum_{n=0}^{\infty} n P_n \\ &= \left(1 - \frac{\lambda}{\mu}\right) \sum_{n=0}^{\infty} n \left(\frac{\lambda}{\mu}\right)^n \end{aligned}$$

を求める。いま， $|x| < 1$ において $\sum_{n=0}^{\infty} x^{n+1}$ を考える。

$$\sum_{n=0}^{\infty} x^{n+1} = \frac{x}{1-x}$$

であり，両辺を x で微分すると

$$\sum_{n=0}^{\infty} (n+1) x^n = \frac{1}{(1-x)^2}$$

となる。この式の左辺は

$$\begin{aligned}\sum_{n=0}^{\infty} (n+1)x^n &= \sum_{n=0}^{\infty} nx^n + \sum_{n=0}^{\infty} x^n \\ &= \sum_{n=0}^{\infty} nx^n + \frac{1}{1-x}\end{aligned}$$

と表せるから

$$\begin{aligned}\sum_{n=0}^{\infty} nx^n &= \frac{1}{(1-x)^2} - \frac{1}{1-x} \\ &= \frac{x}{(1-x)^2}\end{aligned}$$

ここで、 $x = \frac{\lambda}{\mu}$ ($0 < \frac{\lambda}{\mu} < 1$) を代入すると

$$\sum_{n=0}^{\infty} n \left(\frac{\lambda}{\mu}\right)^n = \frac{\frac{\lambda}{\mu}}{\left(1 - \frac{\lambda}{\mu}\right)^2}$$

従って

$$L = \left(1 - \frac{\lambda}{\mu}\right) \frac{\frac{\lambda}{\mu}}{\left(1 - \frac{\lambda}{\mu}\right)^2}$$

$$= \boxed{\frac{\lambda}{\mu - \lambda}} \quad \dots\dots(1)$$